

---

# 死神譚 ~ 死神と少女 ~

みなかたばろん

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

死神譚〜死神と少女〜

### 【Nコード】

N6680H

### 【作者名】

みなかたばろん

### 【あらすじ】

神の命に従い魂を導く一人の死神がいた。多くの人を導く中で死神はある少女と出会う、彼女は特別な魂の持ち主であった。

天窓から何物にもさえぎられない純粹で強烈な光が差し込んでくる。今日は『中の日』かそう思い、男は地球を見上げた。男の視線の先には、真つ青な地球が輝いていた。まん丸の地球が暗黒の宇宙にぼつかりと浮いているのである。男のいるところからはほぼ中天にあたる。であろうかその地球の位置は。

男は静かに振り向いた。私室の扉がノックされたからだ。男が何か反応を示す前に扉は開き、1匹のウサギが入ってきた。その手には2つ折りされた紙が握られていた。

「仕事だよ」

そう言つて男に手渡すと後は無言で部屋を出ていった。男はその紙面にさつと目を通すと、ふたたび地球を見上げた。

男は先ほどの紙をアタツシケースにしまつと、丈長のコートを身に着ける。たしか今、地球は冬のはずだ。手袋も帽子も身につけ、上から下まで黒一色の姿になって、男の準備は終わった。そしてアタツシケースを手にとつと、何のためらいもなく天窓に向かつて跳躍した。次の瞬間、眼下には月面が広がつた。いつもと変わらぬモノトーンに近い世界。男はこの月が何よりも好きだ。月面が球に見え出した頃、上昇速度は衰えてきた。そのときである。男の背中から何か広がつた。漆黒に輝く翼である。男は地球からの反射光を全身に受け、地球に向けてもうひと羽ばたきした。

地球の大気が近づいてきた。男はわずかに翼を縮める。その濃い大気は、翼を広げておけば静止できるほど濃密で、そして多くのものを含んでいるだ。男の鼻を臭気がさした。

「オゾンか」

この臭いだけには慣れそうも無い。そう男は思った。だが近年その臭気も薄れていつている。男はさらに下降を続けた。いくつもの層を抜け、最下層、対流圏に到達した。そこで完全に翼を閉じた。あとは自分がたどり着きたいという意志の力で降下していくだけだ。

地上に無数の光が見えた。あるものは固まって在り、またあるものは転々と、地上を覆っている。男が向かう先も、その光の点のどれかである。しだいに地上の様子がはつきりとしはじめた。そして男は一つに光を見つけた。自分が行く目的のところである。男の体はその光に向かってごくゆっくりと落ちていった。

男は一度翼を広げ、ふわりと建物の上に降り立った。小さな病院の屋上である。翼を仕舞った男は、内部への階段を降りていった。

まだ日が落ちて間も無い病院の中は、医師や看護婦が仕事をしていた。黒一色の異様な格好をしている男に気づくものは居ない。彼は普通の人達には決して見る事が出来ないのだ。男は目的の人物を見つけた。ほうけたように廊下に立ちつくし、病室の中を見ている。

「お気づきですか？」

男の方から声をかけた。立ち尽くしていた老人はしばらく間があつて、男のほうに顔を向けた。

「あんたは？」

「死神です」

男は静かに帽子を取って言った。

「じゃあ、あそこにあるのは……」

老人は病室の中で横たわる、自分の体をさしてそう言った。

「あなたの前の体です」

「死んだってことか？」

「そうですあなたの体は」

「あつけないものだなあ……」

「そうですね」

男は淡白に答えた。

「わしをどこかに連れて行くのか？」

「それはあなたが選ぶことです」

それを聞いた老人は意味がわからないようだった。

「すぐ思い出します。で早速手続きに入りたいと思うんですが」

そう言うと男はアタツシユケースから何部かの書類を取り出し、読み始めた。

「あなたは幽魂条例第一条、第一項および第二項に基づいて、以下の選択権があります」

そこまで男が言ったとき、老人の顔に確信の表情が浮かんでいた。

「そうだったなあんたは死神だ。もう今回で5回目になるのか……」

「続けます。一つ、再び人として生を受け、この地上に残ること。

二つ、この通知を行いし死神とともに月に昇ること。以上」

老人はしばらく考えさせてくれと言って、歩き出した。何度経験していても誰しもがここで悩む。それを知っているから、男は無言でうなずいた。

老人が考えている間、男は老人の今生での履歴を見ていた。これを見る権利も死神には与えられている。

「良い人生だな」

5つつの履歴すべてに目を通し、男はそうつぶやいた。裕福と言えるほどではなかったが、その履歴に不幸の匂いはしない。ふと病室の中を覗いてみると、多分夫人であろう、老婆が今でも老人の手を握りつづけている。その周りにも子供や孫と思われる人達があるときを静かに待っている。

老人が静かに戻ってきた。

「わしはもう少し地上を見ていたい」

「そうですか。では書類にサインを」

老人はうなずくと、男から書類とペンを受け取った。そして今生での名前を記す。

「確かに。今あなたの魂と体が、切り離されました」

その言葉と同時に病室の中から嘆きの声があがった。その病室の様子を老人は感慨深げな表情で覗いている。

「追って、新しい体のほうの請負人が来ますので、詳しくはそちらに」

「ああ、分かってる…」

老人は振りかえることなく答えた。男は老人に一礼すると、その場を立ち去った。

屋上に出た男は翼を広げ、月へ向けて羽ばたいた。

対流圏の中を男は羽ばたいている、月へ向かう道の途中で、請負人と会う手はずである。目の前からせかせかと走ってくるウサギがいた。請負人である。大方は地球と月の真ん中で会うのだが…。

「確認を」

男はウサギに先ほどの書類を渡した。

「確認条項は十四項と十六項…それに三十一項まちがいないな」

ウサギが言った。その言葉に男はうなづく。ウサギは肩掛けかばんの中にその書類を仕舞うと、別の用紙を出してきた。

「おまえに別な仕事が入ってる。骨かもしれないがそちらに向かってくれ」

男は紙面に目を落とす。

「特S…」

「そつだ確実に月に昇らせるんだと」

「刈れってことか」

その男の言葉を聞いてウサギは難しい顔をした。

「良い言葉じゃないな、それは。俺は行くぞ魂を待たせておくのも悪い」

「ああ、俺も仕事にかかるとする」

男はそう言ってウサギと別れた。

『特S』と呼ばれる仕事は死神達のなかでも嫌われている。あの悪しき死神の姿そのままを行うからだ。『刈り手』としての死神をしなければならぬからだ。しかし仕事となればそれをやらないわけにもいかない。男は目的地に着くまで、対象者の履歴を読みだした。

『…今生での肉体年数9年』

決して珍しいケースではない。男も過去に何十人とそういった魂の仕事をしている。1つ前のページをめくる。

『8年』

次、

『11年』

次、

『12年』

次、

『5年』

次、

『9年』

次、

『4年』

次、

『6年』

以下14枚の紙に1桁の年数だけが記載されている。

「22度の転生か…」

男はそう呟く。普通のものなら多くても10回である。この対象者はあまりにも多い。男は対流圏に静止した。そしてアタツシユケースに、資料を要求する。資料はすぐ届いた。分厚いファイルの形である。男はまずページ目から開きます。そこに答えがあった。『D』 マークだ。それを再び確認して、男はファイルをアタツシユケースに返した。

「また神のお遊びか…」

そう言っつて、月を眺めた。ときどき神は『お遊び』をする。この仕事を始めてから、男はそのことを知った。むろん その相手に直接関わることになるのは、これが初めてなのだが…。

「仕事だ。これは…」

男はそう自分に言い聞かせ、再び飛行を始めた。

男は海面すれすれを飛んでいた。海の香りは男も嫌いではない。それは昔と変わらないことだった。目の前に港が見え出す。それが男の目指す町であった。男は高度を取り目的の病院へと向かった。今の時代、今生は病院で始まり、終わる。肉体の永さに関わらず。そんなことを思いつつ、男は一つの窓から病室の中へ入っていた。

翼を仕舞った男は、ベッドのほうに近づいていった。ベッドの上にはあどけない表情の少女が眠っている。男は、きつと眼もきれいなんだろうな。と、ずいぶんと昔のことを思い出しながら考えていた。だが男がここに来て去ることで、その少女のまぶたが再び開くことは無くなる。男は死神なのだ。

「おじさん、だあれ？」

少女が不意にそんな問いかけをしてきた。少女は起きていたのだ。そして男が見えるということは少女の死が濃く なったということである。

「死神です」

男はいつもどおりの答えを返す。それを聞いて、少女は表情を引きつらせ、一心に神の名を唱え出した。無理も無い 反応だろう。だが男はその少女の姿が悲しくなった。少女に死を渡すのは、その『神』自身なのだから。

「私は神の使いです」

そう言って、男はずるい手だと思った。

「神があなたを迎えに行けと、御命じになって参りました」

嘘はついていないのだが…、心苦しい思いである。だがそれはこの仕事に必要な無い感情だ。

「神…さまが？」

少女は男を見た。

「そうです。神の御命令です」

男は無感情な物言いをした。普通の魂なら、以前のことを思い出すのだが、この子にはそれが無い。魂すらも束縛されているのだ。

「神さまが、あたしに来たって？」

男は無言でうなずいた。

「神さまは、どこにいるの？」

少女がきれいな瞳で聞いて来る。

「月にいます。月に在る宮殿にいます」

少女が満月に近い月を眺めた。

「あそこに行けるんだ…」

男も月を見た。少女はどんな月を思っているのか…男の知る月は、太陽のように輝かない。

「行く。あたし、行ってみたい。神さまにも会ってみたい」

少女は好奇心の塊のような、顔でそう男に言った。

「では、これにサインを」

男は少女に書類を渡す。少女は慣れない様子で名前を書いた。

「月までは、私が連れて行きます」

書類をアタッシユケースに仕舞った男は、そう少女に言った。

「この翼で」

そして漆黒の翼を広げた。

「……………！」

少女は声にならない声を上げた。その顔には無邪気な笑顔が浮かんでいる。とても素敵な笑顔だ。

男は静かに少女の手をとり、月に向けて羽ばたいた。

天窓からの光がだんだん強くなっていく。地平線から地球が昇り始めたのだ。男の部屋の長椅子に、小さなウサギが赤ん坊のように眠っていた。

「『D』だったんだって？」

その様子を母親のように見つめていたウサギは男に聞いた。

「ああ、神のおもちゃだったのさ」

そう言って、ブランデーを一気に流し込む。いまだに頭からあの少女の笑顔が消えない。

「魂の選択権はもとより、それに付随する肉体の選択権も、また無い。幽魂特記条項の最初に在る。神のみが振るえる特権だ」

男はそう続けた。

「何でこの子はウサギになったんだ？」

ブランデーをすすってウサギは言った。

「おまえと同じことを望んだんだよ」

男がウサギの目を見て言った。

「地上に戻りたいと」

「…また、神のいたずらか…。だがこの仕事もつらいぞ」

ウサギはグラスを置き、長椅子に近づいていった。

「今は何も知らず眠っていればいい。ゆっくりと…」

ウサギは母親がそうやるように、長椅子の占拠者の頭を撫でた。

「そうだな」

男はそう言って天窓のブラインドを閉めた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6680h/>

---

死神譚～死神と少女～

2011年1月13日08時45分発行